# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 2 年目)

1. 研究課題

清代～近代における経学の断絶と連続：目録学の視角から

(Dis)Continuity of Jingxue from the Qing Period through to the Modern Age: From the Perspective of Muluxue"

2. 研究代表者氏名

竹元　規人

Takemoto Norihito

3. 研究期間

2020 年 4 月-2023 年 3 月(2 年目)

4. 研究目的

中国は独自の伝統的学術を有し、それは長い歴史のなかで大きな変遷をたどって来た。本研究は、その学術の清代から近代にかけての断絶と連続を、次の視角から明らかにすることを目的とする。まず、章学誠の「六経皆史」説などを根拠として、「経学から史学へ」という命題が中国近世・近代思想史において言われるが、学術の淵源と展開を跡付け、学術を分類しながらその統一的把握を図る章の目録学の立場から出発して、経学が史学を含む様々な学術へと転換する契機を清代学術史の中に探る。次に、「六経皆史」への解釈等、清代学術に関する通説的理解がいかにして確立してきたのか、清末以来の学術史の言説を見直すことで跡付ける。最後に、第一の視角によって得られた清代学術史の見通しの上に、第二の視角から跡付けられた近代学術史を位置づけることで、二つの視角を総合し、それによって清代から近代にかけての、経学の断絶と連続とを、鳥瞰的に明らかにする。

China has its own traditional scholarship, which has undergone a great deal of change throughout its long history. The purpose of this study is to clarify the (dis)continuity of Chinese scholarship from the Qing period to the modern era using the following perspectives. First, based on Zhang Xuecheng’s contribution to Muluxue, we look for those opportunities in the history of scholarship throughout the Qing period that have allowed for the transformation of Jingxue into various academic disciplines, including history. Zhang’s Muluxue traced the origins and development of scholarship, classified it, and tried to present it in a unified manner. The theory of “Liu Jing Jie Shi (the Six Classics are

all history)” does not necessarily only apply to the transformation “from Jingxue to history”. Second, we trace how the commonly held understanding of Qing scholarship, such as the interpretation of the theory of “Liu Jing Jie Shi “, was established by reviewing the discourse on the history of scholarship that has occurred since the late Qing period. Finally, we combine these two points of view to provide a bird’s-eye view of the (dis)continuity of Jingxue from the Qing period through to the modern era.

5. 本年度の研究実施状況

本研究班は、清代から近代にかけての、中国学術の断絶と連続とを探究するという目標のもとに、まず、前近代と近代との結節点のひとつである、章学誠『文史通義』の訳注に取り組んできた。

このような見通しのもと、前年度に引き続き、『文史通義』内篇に詳細や訳注を加えるべく、班員による会読をおこなった。

本年度は、あわせて十四回の会読を実施し、『文史通義』巻五を訳了した。これにより、『文史通義』内篇の全編を読了したこととなる。

また、訳注稿の出版については、「『文史通義』内篇四訳注」として、『東方學報』96 号（二〇二一年一二月）に掲載することができた。

現在、巻五の訳注稿を整理しつつあるところであり、次号の『東方學報』への掲載を目指して作業中である。

6.本年度の研究実施内容

2021-04-20 「申鄭」篇会読　発表者 古勝隆一
2021-05-18 「答客問上」篇会読　発表者 渡辺大
2021-06-01 「答客問中」篇会読　発表者 内山直樹
2021-06-15 「答客問下」篇会読　発表者 藤井律之
2021-07-06 「答問」篇会読　発表者 田尻健太
2021-07-20 「古文公式」篇会読　発表者 重田みち
2021-10-19 「古文十弊（一)」篇会読　発表者 竹元規人
2021-11-02 「古文十弊（二)」篇会読　発表者 永田
2021-11-16 「浙東学術」篇会読　発表者 福谷彬
2022-12-07 「婦學（一)」篇会読　発表者 古勝隆一
2022-12-21 「婦學（二)」篇会読　発表者 古勝隆一
2022-01-18 「婦學（三)」篇会読　発表者 古勝隆一
2022-02-01 「婦學書後」篇会読　発表者 新田元規
2022-02-15 「詩話」篇会読　発表者 山口智弘

7. 共同研究会に関連した公表実績

「『文史通義』内篇四訳注」(『東方學報』96 号、二〇二一年一二月）を『東方學報』に掲載することができた。

8. 研究班員

所内

古勝隆一、福谷彬、永田知之、藤井律之、白須裕之、楊維公

学内

宇佐美文理(京都大学大学院文学研究科)、道坂昭廣(京都大学大学院人間環境学研究科)、王孫涵之(京都大学大学院文学研究科)、臧魯寧(京都大学大学院文学研究科)、王歓(京都大学大学院文学研究科)、田尻健太(京都大学大学院文学研究科)、成田健太郎(京都大学大学院文学研究科)

学外

竹元規人(福岡教育大学教育学部)、内山直樹(千葉大学)、渡邉大(文教大学・文学部)、重田みち(早稲田大学・演劇博物館)、山口智弘(駒澤大学・文学部)、白石將人(三重大学)、小島明子(新潟大学)、古橋紀宏(香川大学・教育学部)、新田元規(徳島大学・総合科学部・准教授)、馬延輝(清華大学・歴史学系)、李 弘喆(上海師範大学)、中原佑真(帝京大学・文学部)

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

| 区分 | 機関数（必須） | 受入人数 | | | | | 延べ人数 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 総計 | 海外研究者 | 若手研究者（40歳未満） | 若手研究者（35歳以下） | 大学院生 | 総計 | 海外研究者 | 若手研究者（40歳未満） | 若手研究者（35歳以下） | 大学院生 |
| 学内（法人内） | 1 | 13 | 4 | 6 | 6 | 3 | 118 | 28 | 51 | 51 | 34 |
| | | (1) | (1) | (0) | (1) | (1) | (12) | (12) | (12) | (12) | (12) |
| 国立大学 | 6 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 46 | 0 | 8 | 0 | 0 |
| | | (1) | (0) | (1) | (0) | (0) | (8) | (0) | (8) | (0) | (0) |
| 公立大学 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) |
| 私立大学 | 3 | 4 | 0 | 0 | 1 | 0 | 21 | 0 | 0 | 6 | 0 |
| | | (1) | (0) | (0) | (0) | (0) | (13) | (0) | (0) | (6) | (0) |
| 大学共同利用機関法人 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) |
| 独立行政法人等公的研究機関 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) |
| 民間機関 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) |
| 外国機関 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 8 | 8 | 8 | 8 | 0 |
| | | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) | (0) |
| その他 ※ | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 計 | 12 | 25 | 6 | 8 | 8 | 4 | 193 | 36 | 67 | 65 | 34 |
| | | (3) | (1) | (1) | (1) | (1) | (33) | (12) | (20) | (18) | (12) |

※「その他」の区分受入がある場合
具体的な所属等名称を記載：例）高校教員
無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

| | 共同利用・共同研究による成果として発表された論文数 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | うち国際学術誌掲載論文数 | |
| ①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著） | 2 | | 0 | |
| ②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著） | 2 | | 0 | |
| ③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著） | 1 | | 0 | |
| ④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著） | 0 | | 0 | |
| ⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著） | 0 | | 0 | |

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

| 雑誌名 | 掲載論文数 | 掲載年月日 | 論文名 | 発表者名 |
|---|---|---|---|---|
| 中國思想史研究 43 | 1 | 2022 年 3 月 | 段玉裁『古文尚書撰異』序譯注（二） | 田尻健太，古勝隆一 |
| 東方学報 96 | 1 | 2021 年 12 月 | 『文史通義』内篇四譯注 | 『文史通義』研究班 |
| 東アジアの王権と秩序（汲古書院） | 1 | 2021 年 10 月 | 「隋朝における一切経書写の意義――「宝台経蔵」をめぐって」 | 古勝隆一 |
| 岩波講座 世界歴史 第 5 巻 | 1 | 2021 年 11 月 | 「礼体系の継承と変容――性差の観点から」 | 古勝隆一 |
| 東方學 142 | 1 | 2021 年 7 月 | 「『禮記子本疏義』分卷考 ： 清家『禮記』證本の義疏卷數記號を手掛かりとして」 | 王孫 涵之 |

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

本研究班は、清代から近代にかけての、中国学術の断絶と連続とを探究するという目標のもとに、まず、前近代と近代との結節点のひとつである、章学誠『文史通義』内篇の訳注に取り組んできたが、2022 年 2 月をもって、ひとまず、その全体の訳注稿を作ることができた。

『文史通義』内篇の五巻のうち、すでに巻一から巻四までの内容を整理して『東方學報』に掲載することができたが、来年度は、巻五を整理し、『東方學報』に投稿する予定である。

そしてこの基礎の上に、本年度は、清代から近代にかけての中国学術に関する研究発表を、班員各位により順次おこなう予定である。開催は、月一回、年十回とする。

さらに、2023 年 2 月には、当該研究テーマに関する国際学術集会の開催を企画しており、目下、その準備を進めているところである。

13. 次年度の経費

| | | 開催回数 | 国内出張旅費（延べ人） | 支出予定額 |
|---|---|---|---|---|
| 国内旅費 | 研究会参加費 | 10 | 20 | 600000 |
| | 一般旅費 | 0 | 0 | 0 |
| 海外旅費 | 渡航旅費 | 0 | 0 | 0 |
| | 招へい旅費 | 0 | 0 | 0 |
| 謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金） | | | | 100000 |
| 消耗品等経費 | | | | 50000 |
| その他 | | | | 0 |
| 合計 | | | | 750000 |

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

来年度は、すでに班員による検討を経た、章学誠『文史通義』内篇の巻五の訳注稿を整理し、『東方學報』に投稿する予定である。なお、『文史通義』内篇の完訳を終えた際には、さらに原稿を再整理して、新たな形での出版も計画しているところである。

また、来年度の研究発表を踏まえ、『章学誠の可能性』という研究論文集を、再来年度に刊行する予定である。

以上、『文史通義』内篇の全訳、および清朝・民国期学術に関する論文集を刊行することをもって、本研究班の成果としたい。